

今年最後の聖日を迎えました。この朝は、去る一年、週報や聖務表（カレンダー）に載せてきました、この使徒の働きのみことばから、主の御声に聴かせていただきたいと思います。パウロとシラスが、ヨーロッパのマケドニヤ地方にあるピリピという町で、みことばを語り、また悪霊につかれた女性から悪霊を追い出したことがきっかけで、不当に捕らえられ、鞭打たれ、牢に入れられたところです。そこでパウロたちの身に起こったこと、それは、実に災いといしか言いようのない出来事でした。けれども神様は、そのような中で、パウロたちの見張りをしていた看守を、そして彼の家の者全部を救いへと導かれたのです。

使 16:25-29「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。26 ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。27 目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げってしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。28 そこでパウロは大声で、『自害してはいけない。私たちはみなここにいる』と叫んだ。29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。30 そして、ふたりを外に連れ出して『先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか』と言った。31 ふたりは、『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます』と言った」。

「救われるためには、何をしなければなりませんか？」という看守の問いに、パウロは「これをしなさい。あれをしなさい」ではなく、ただ「主イエスを信じなさい」と言いました。皆さん、今日あなたは、救われるために主イエスを信じておられますか？また、それに続く「あなたもあなたの家族も救われます」という主の約束を信じておられるでしょうか？

ここでの看守とその家族の救いは、ほど同時に起こっていますから、自分の家族もこのように救われてほしかったという人は、少なくないと思います。家族がいつ救われるのかわからないよりは、皆がいっしょに救われた方が、それに越したことはないからです。ただそうでないことが、ほとんどといって良いと思います。というのも、ここで看守の家族が彼と共に救いに導かれた理由として、当時の家族関係、つまり、家長の信仰が、その家の者全体に与えた影響が大きいことが考えられるからです。では、看守の家族の救いは、すべて彼の信仰にかかっていたのか？つまり、家族の者は主を信じていなかったのに、看守の信仰によって彼らも自動的に救われたということですか？そうではありません。彼らもまた主イエスを信じたのです。だからその後、皆が主の死と復活にあずかるバプテスマを受けました。

一人の人が主を信じるなら、その信仰は、その人自身はもちろんのこと、配偶者や子ども達を含む、その周囲にいる人々にも必ず影響を与えていきます。主のすばらしさ、その真実が、その人を通して証されるからです。私たちは、他者に信仰を押しつけるべきではありません。主イエスとその福音を信じていないのに、「洗礼を受けたら救われる」と偽りを語ってはいけないのです。日本の人は、何を信じるか、という信仰の対象よりも、信じること自体に重きを置きやすいと言われます。ですから、何を信じているのかわからない、という人が少なくありません。でも、私たちが信じるのは、主イエスです。なぜなら、私たちを罪と滅びから救うことのできるのは、神の救い主なる主イエスだけだからです。

今日の箇所において、パウロが「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言ったのは、誰に対してですか？それは看守に対してです。つまり、この看守と彼の家族の救いの出発点となったのは、看守という一人の人でした。救いは、いつもそのようにして始まります。私たちでいうならば、あなたという一人の人を通して、主の救いは、あなた自身にも、またその家族にも及んでいくのです。ですから、神様は、まず私たち一人一人に、あなた自身に主イエスを信じることを問われます。もっというと、あなたの主への信仰（信頼）とその生き方を問われるのです。

もう一度、言いますが、私の信仰が、家族を救うのではなく、それは主イエスです。でも私の信仰が、人々に救い主を指し示すものであるゆえに、それはとても重要なわけです。今日あなたは、そのことを真摯に受け止めておられますか？それゆえに、主のすばらしさが現されるために、意識して歩んでおられるでしょうか？

どうぞ考えて見て下さい。あなたが本当に主イエスを信じているなら、あなたは主と一つとされています。主は、ご自身の御霊をもって、あなたのうちに、そのただ中に住んで下さっているのです。あなたが自分の欲、肉に従うことを求め、自分が大きくなり、それによって御霊を小さくすることさえなければ、主は、あなたを通して栄光を現わされるのです。暗やみの中に輝く光を無視できないように、私たちを通して放たれる主の光も無視することはできません。主の光は、暗やみの中にいる人々を照らすためのものだからです。

御使いガブリエルを通して、主イエスを身ごもると告げられたマリヤは、「私は主のはしためです。どうぞおことば通り、この身になりますように！」と書いて、主への信仰を表しました。彼女が主を信じたという時、それは語られたことをただ情報として受け留めたということではありません。マリヤは、自分の身に起こるだろう変化や危険を含め、それを受け入れた上で、主に信頼し、自分自身を主にゆだねたのです。そして主もまた彼女と共におられることで、彼女を守り、おことば通り、恵まれた者としての歩みをさせて下さいました。

救い主を内に宿すという恵みは、マリヤだけに与えられたものです。でも実は、今日主イエスを信じる私たちには、マリヤと同じ恵みが、いやそれ以上の恵みが与えられています。なぜかわかりますか？すでに見たように、主はご自分を信じるすべての者のうちに聖霊を通して住んでいて下さるからです。神様が共におられるのです。主を身ごもることで、マリヤが姦淫の女として人々から白い目で見られ、またいくつも困難の中を通ったように、主を信じ、主をうちに宿す私たちも、この世にあっては困難の中を通ります。この信仰のゆえに迫害は避けられないのです。でも神様は、そのような中で信じる者と共におられ、ご自身の力をもって私たちを強めて下さいます。それによって私たちが主ご自身と救いの完成をいよいよ待つ望むようになるためです。

では、そのように私たちの信仰が、自分自身も、また他者をも救いに導くものであるなら、なぜ主は、ルカ 14:26-27 でこのように言われるのでしょうか？「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者 (does not hate) は、わたしの弟子になることができません。27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません」。これはどういう意味ですか？この主のおことばは、「父母を敬いなさい」や「妻を愛し、夫に従いなさい」といった神様の教えに反するようにも思えると思うのです。

私たちをして主の弟子となるために、自分の家族や自分自身のいのちまでも憎む理由、それは私たちが罪人だからです。私たちはみな自分で自分を救えない、生まれながらに自己中心な罪人だからです。この罪ゆえに、私たちはみな必ず死ぬ存在であり、神様の前にさばきを受けて滅びに至る者です。にもかかわらず、そのことを認めず、自分自身を含め、人のうわべだけを見て、人間的に彼らを愛するなら、私たちは主の十字架の必要性を決して悟ることができません。そして、主の十字架の意味がわからないなら、主に救いを求めることもしないのです。結果、主を愛し、主の御声に聴き従う弟子となることはありません。

でも、その罪ゆえに、家族を、また自分自身のいのちさえも憎むなら、そのような罪人のために、主イエスがこの世に来られ、十字架の苦しみと死をもって、私たちを罪と滅びから贖い出して下さったことの意味を、その愛の大きさを知るようになるのです。そして、さらにその愛が、私自身だけではなく、私の家族、またすべての人にも向けられていることを知るようになります。そうすると、主イエスを愛し、この方のみ救いの望みを置いて従うことこそ、自分にとっても、家族にとっても救いとなることを私たちは知るのである。私が自分自身や家族を愛するよりも遥かに超えて、主が私と私の家族を愛しておられるからです。

この世において私たちがしている戦い、それは霊の戦い、信仰の戦いです。それが困難や試練であれ、また快適さや快樂であれ、悪魔は、私たちの心からこのすばらしい主への信仰、信頼を失わせようと日々巧みに攻撃をしかけてきます。何とかして、私たちに主を信じさせないようにするためです。というのも、主を本気で救い主と信じていないなら、誰が自分を捨て、日々自分の十字架を負って主に従いますか？「信じている」と口で言うのは簡単です。でも、主が私たちに求めておられるのは、ご自分に聴き従うことです。そのような歩みは本気で主を救い主と信じていなければなりません。いや、実のところ、私たちはみな、どこかで自分自身を最も愛するゆえに、この信仰の戦いを自分の力で戦い抜くことなどできないのです。

でもだからこそ、主イエスは、助け主を私たちに与えて下さいました。主ご自身が、聖霊を通して私たちと共にいて下さることで、私たちにご自身とそのすばらしさをわからせて下さるため、またそれによって、私たちがいかなる時にも主に信頼し、主を証できるよう、主から力を受けることのできるためです。ですから、私たちの側としては、主イエスを信じるのが間違いなく重要なわけですが、でも実は、信仰の弱い私たち、救われた後も自己中心な歩み続ける私たちを支えて下さっているのは、主イエスです。信仰の創始者であり、完成者である主が、その完全な信仰をもって私たちをしっかりと捉えて下さっているのです。私たちは弱さや欠けを覚え、何度も失敗を繰り返す中でも、なおこの主にあつて、救いの望みをもたせていただくことができます。主ご自身が、私たちの、あなたの救いを望んでいて下さるからです。

ヘブル 11:6 「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです」。神様を求める者には、神様は必ず報いて下さいます。求めても受けられないのは、主ご自身ではなく、主の持ち物や主がして下さることだけを求めからです。でも主は、ご自身を求める者には、こうように約束しておられます。ルカ 11:13 「してみると、あなたがたも、悪い者ではあつても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますか？」。

あなたは三位一体の神を信じておられますか？ そうであるならば、神様が求める人に聖霊を下さるということが、どういうことかはわかりただけだと思います。実に神様は、ご自身を与えて下さるのです。この天地万物を造られた方、今もそれを御手に治めておられる方、御子を死者の中からよみがえらされた方が、ご自身を求める者には、そのようにご自身を与えて下さるのです。これが報いでなくて何ですか？ 主が共におられるのですから、主は私たちを通して救いのみわざを行われるのです。たとえそれが私たちの目にはそう見えなくても、私たちの心ではそのように理解できなくてもです。

私たちが成すべきこと、それは日々、そして意識的に、主の福音を語ること、自分自身にも、家族を含む他の人々にも語り続けることです。なぜなら、主の十字架の前に出るならば、自分が罪人であることが示されるからです。そのこと自体は、決して喜ばしいことではありません。でも同時に、その罪人を救うために神様がどれだけ大きなことをして下さったかも示される。つまり、父なる神様が、御子を十字架につけ、彼の死をもって私たちを罪と滅びから贖い出して下さったこと、それがいかにあり得ないことか、いかに恵み以外の何ものでもないかをわかるようにされるのです。

そのようにして福音によって日々生かされるなら、私たちのうちで主を信じること、そして、それによって与えられた救いが、つまらないものや古くなることは決してありません。むしろ、そこには主への感謝と喜びが溢れることで、私たちはいよいよ主に信頼し、その御声に従わずにはおられなくなるのです。私たちのうちで、そのようにして自分自身は小さく、でも主イエスが大きくなられるなら、私たちは自分に対しても、また家族の救いに対しても、主にあつていつでも望みをもてるようになります。たとえ人間的には不可能に思えてもです。なぜなら、主には、不可能なことはないからです。この主を信じ、自分自身のため、家族のため、また周囲にいる人々のために、主の福音（救いの良い知らせ）を宣べ伝えていこうではありませんか。